

よう命令を出した。しかし仕事を中止していたせいもあって工場と宿舎に散在しており何も知らない社員も数多くいた。私は工場に居たのでその命令は聞いた。

数日前買ったばかりの給料が十数万円荷物と一緒にまとめて宿舎に置いて来たので惜しかった。実戦経験のある私は取ってこようよと決心した。命も惜しかった。一目散で狙撃のあった道路を駆け抜け宿舎に飛び込み荷物を切りさき金だけを持って工場へと戻った。途中風呂上がりの姿でタオルを首に巻き歩いている人もいた。息せき切って引揚げの急を告げたがふり向きはしなかった。

工場に辿りつき二台のトラックに分乗した。鈴成りに乗った自動車は工場の塀を出た途端、私達の乗ったトラックは故障した。予備役曹長の幹部が指揮して歩いて低い所を通過して逃げるよう指示していた。

宿舎の裏山からは間断なく銃撃が続いている。しかし暗いせいもあって誰も負傷することなく一時間くらいで張店に辿り着いた。日本軍は城壁から一步も外へは出なかった。

会社の幹部は課毎に人員を点検したが二十数人足りな

かった。家族持ちの社員もいた。気の毒に思ったがなさめの言葉もなかった。

張店の事務所でまんじりともせず一夜を明かした。翌日捕った二十数人が何がしかの荷物を持って帰って来た。日本語の分かる朝鮮人二人が丸腰で引率して部隊本部を訪れ引渡しの証明書を貰って帰って行ったと聞き感動した。これが日本軍だったらどうだろうと思うと戦慄を覚えた。

其の後破壊された鉄道を青島から修理して前進して来た日本軍の合間をぬって青島に辿り着きアメリカのリバティ貨物船で佐世保に上陸、広島、東京の焼け野が原を通過して真白な雪の北海道に着いたのは十二月の始めだった。

病弱のむすこを抱えて

兵庫県 田 淵 賢太郎

昭和十二年七月、支那事変に召集され、鳥取歩兵四十

連隊に入隊、八月北支に派遣され一線部隊で従軍、十四年に現地満期除隊、華北交通(株)に就職、太鉄局勤務、十八年、妻を呼び寄せるため帰国、十九年同伴渡支。五月、現地駐屯部隊に教育召集、一か月入隊、六月妻子とともに赴任、会社近くの契約社宅に入居、いちおう平穩なる日々。

敗戦で事態は一変、婦女子は外出禁止。会社は中国側と地位逆転。退社時は、所持品検査を受ける状態。いっになるかわからない引揚げのため、物品を売る。足元を見られて買ったたかれ、ときには品物を持ち去られたことも。

十二月初め引揚げ決定、必需品をまとめ、太原引揚げ者収容所へ。

十二月末、石家荘収容所へ移動。仮設兵舎の跡のようなどころで、防寒設備は悪く、手持ち衣料では寒い。特に幼児はカゼをこじらせ、肺炎となり、死亡一日七体火葬も。そのうち、私が肺炎となり、熱は高く、胸が焼けるように苦しい。牛肉で湿布すると良いと聞き、二センチぐらいの厚切りの肉四枚大枚を支出して二回湿布する

も効果なし。妻が温湿布が良いと聞いてきてタオル二枚を縫い重ねて二組作り、飯ごうで煮沸し、背中胸に巻き、その上に油紙、乾タオルで巻く。二時間で、温度が下がる。取替えなければ効果が無い。夜間、屋外であかりを漏らしては危険なので、妻は段ボールで囲いをつくり、危険を冒して湿布を続けてくれた。二時間置きで、夜寝ることもできない。翌日効果が現れ始めた。胸の苦しさが徐々に消え、熱も下がり、楽となる。数日で元氣回復、一命助かる。二十一年一月豊台収容所へ移動、貨物列車で途中保定駅で停車中、中国兵が二人拳銃を突きつけ侵入、皮製トランクに詰めたいせつな衣類を持ち去られた。豊台収容所は、糧秣倉庫跡で換気が悪く、食糧も半分が高梁飯、十か月に満たないわが長男は、水疱瘡が悪化、気管支肺炎に。幸運にも日本軍医がいたので、手厚い治療を受ける。快方に向かうが、完治せず、帰国のための検診があったが、そのたびに発熱不合格。民間人引揚げが最後となり、収容所が閉鎖されるため、天津収容所へ。四月二十七日、柳行李に子どもを入れ、両端に紐をつけて首に吊るして移動。天津の検診でやっと合格。

翌三十日所持品検査、妻が母よりもらったたいせつな真珠の指輪を中国女子検査官に没収された。ひとり千円と持てる範囲の身回り品。余談ながら帰国者が残した荷物、フトンだけでも三メートルを越える山が十五以上。首に子どもを吊るしているので荷物は持てない。列車に乗ってターク港へ、そして乗船。米軍の上陸用舟艇の換気は悪く、長男がまた発熱、幸運にも医者がおられたが、衰弱ははなはだしく上陸まで持つか、子ども一人が死に、水葬されたと聞き、心ここにあらず。神仏の加護を祈るのみ。

五月四日、佐世保沖に到着。歓喜の一瞬。五月五日に上陸。米軍のDDT消毒後、婦女子と荷物はトラックで収容所へ。男は雨の中、徒歩で四キロの山越えして収容所。翌日医者にも子どもを受診、注射をしていたのだが、衰弱で吸収されず、化膿。五月七日、故郷兵庫県但馬へ。妻の父が神戸で健在であると聞き、三人で神戸へ。更に母の疎開先岡山県津山へ。また、長男が発熱し、小さな街の病院に入院。良く良く強い運命か、快方に向かい六月十一日に退院。

私は、義父の建築材料商を手伝う。二十三年、大手造船会社に就職。重労働のため肺浸潤となり、二十か月療養、治癒して再出勤、管理部門に転場。五十八年定年退職。さらに再就職、年金生活現在にいたる。

主人を凶漢に襲われ

子供二人と引揚げて

山形県 齊藤 登代

昭和二十一年五月五日、酒田市に長女と三女の遺骨二つを抱いて引き揚げてきました。二十一年三月末になってやっと引き揚げが開始されアメリカの舟艇母艦に積み込まれ天津のタンクウ港より乗船いたしました。佐世保上陸は二十一年五月一日、酒田に着いたのは五月五日でした。故郷に辿り着いた私達は、乞食よりひどい姿でした。強度の栄養失調で、実家にて清浄な身体になるまで養生できたことは何よりの幸いでした。

渡支の動機。亡き主人は教員で昭和十五年三月外務省